

金哲著『植民地の腹話術師たち』を読む Reading *VENTRILOQUISTS* by Kim Chul

波田野 節子
HATANO SETSUKO

新潟県立大学名誉教授

Professor Emeritus at University of Niigata Prefecture

キーワード

植民地主義 朝鮮語 寛容 李光洙 翻訳

Keywords

Colonialism; Korean; tolerance; Yi Kwang-su; translation

Quadrante, No.20 (2018), pp.55-58.

目次

1. 環境整備
2. 言葉と寛容
3. 李光洙の小説「蠅」
4. 方言と翻訳

1. 環境整備

2008年に韓国でこの本が出たとき、名作のさわりがたつぷりと引用されて内容も面白いことに魅了されると同時に、(翻訳する者の癖で)この本を翻訳するのは難しいだろうと考えたことを記憶している。苦勞して翻訳しても日本の読者は植民地時代の朝鮮作家になじみがないから、読んでくれないのではないかと、などということまで考えた。それから9年、渡辺直紀氏が躊躇のすえに翻訳を決意し翻訳作業をしているあいだに、平凡社から朝鮮近代文学選集として蔡萬植の『太平天下』、『金東仁作品集』、廉想渉の『三代』、李泰俊の『思想の月夜』、そして今年の8月には李箕永の『故郷』と、本書に引用されている作家の作品がいくつも翻訳刊行された¹。この9年間は、日本の読者がこ

の本をよりよく理解できるための環境整備に必要な時間であったと考えれば、翻訳までこれほど時間がかかったことはむしろ幸いだったのかもしれない。

2. 言葉と寛容

本書のタイトルは第12章の「植民地の腹話術師たち——朝鮮作家の日本語小説」から取られている。章の最後、「思うに帝国の支配下で帝国の言語で発言する被植民地人は一種の腹話術師である」で始まる二つのパラグラフに「腹話術師」の意味が凝縮して説明されていて、書評を書いた佐野正人も西浩孝もインパクトが強烈なせいか、この部分を引用している²。あまりに印象的な文章なのでどこかで目にしたような気がしてきて、もしやと思って探したところ、金哲氏が2年前に出した『抵抗と絶望』の第6章「愛国と売国」にそのまま載っていた³。こちらの初出は2006年に韓国の学会誌に発表された論文「二つの鏡・民族言説の自画像——張赫宙と金史良を中心に」なので、氏は国

村益夫訳『故郷』も刊行された。

² 佐野正人「植民地の腹話術師たち——朝鮮の近代小説を読む」『週刊読書人』(2017年4月21日)、西浩孝「書評『植民地の腹話術師たち』——純潔への欲望が生みだす暴力」『webRonza』(2017年4月28日、<http://webronza.asahi.com/culture/articles/2017042000005.html>)

³ 金哲著、田島哲夫訳『抵抗と絶望』(大月書店、2015年)、197-198頁。

¹ 平凡社の朝鮮近代文学選集は、(1)李光洙著、波田野節子訳『無情』2005年、(2)姜敬愛著、大村益夫訳『人間問題』2006年、(3)朴泰遠他著、山田佳子他訳『短篇小説集 小説家仇甫氏の日 ほか13編』2006年、(4)蔡萬植著、布袋敏博・熊木勉訳『太平天下』2009年、(5)金東仁著、波田野節子訳『金東仁作品集』2011年、(6)廉想渉著、白川豊訳『三代』2012年、(7)李泰俊著、熊木勉訳『思想の月夜』2016年が出ており、2017年8月に(8)李箕永著、大



立国語院の季刊誌の連載のためにこの論文の内容をコンパクトにわかりやすく書き直したものである。

そのために金哲氏は、金史良の「郷愁」の主人公が、朝鮮語でしかコミュニケーションできない阿片密売人の姉と日本語でしかコミュニケーションできない軍服を着た友人とのあいだで立ちすくんでいる場面を、支配する帝国の言語と支配される植民地の言語とのあいだで引き裂かれた二言語使用者の姿として象徴的に提示した。これは卓見である。そのうえで氏は、主人公を立ちすくませる要因として同族の視線にひそむ〈あるもの〉を摘出する。それは、朝鮮文学を構成するのは絶対的に朝鮮語でなくてはならないという朝鮮人にとっての「自明性」である。この「自明性」のために、朝鮮人が他言語で創作することは母語と同族への背信とみなされることになる。

1936年の『三千里』のアンケートに回答した作家たちは一様に、「朝鮮文学とは、朝鮮文で、朝鮮人が、朝鮮人に読ませるために書いたもの」という編集者の規定を受け入れた。李光洙にいたっては「文学の国籍は属地でもない、属人（作家）でもない、属文（国文）だ」と書いている⁴。母語に対するこのように絶対的な「自明性」は、たとえば日本のもう一つの植民地である台湾では見ることにはできない。金哲氏が挙げているように、李光洙が最初に書いた小説は日本語の「愛か」だったが、彼はすぐに朝鮮語で創作を始めた。また金東仁は構想を日本語でやったにしても、作品は朝鮮語で書いている。それができたのは、彼らには話す言葉を書写するハンゲルがあったからである。台湾では大多数の人々の母語である閩南語は書写できなかったのも、作家たちは様々な試行錯誤をせねばならなかった。閩南、客家、原住民、そし

て光復後は外省人という複雑な族群と言語をもった台湾では属語主義の文学史はありえない。言葉と文化と人種への〈寛容〉なくしては国自体が成立しないのである。

この本の随所で金哲氏が問題にしているのは、一つの言語によって国民文学の境界を守ることが帝国秩序への唯一の抵抗手段だという信念の危うさと、それがもたらす〈不寛容〉の精神である。その信念と不寛容こそが、逆に帝国の秩序を受容することにつながるのだと、氏は警鐘を鳴らす。二つの口をもつ作家がきわどいゲームで自らを破裂させながら母語や国民の神話に亀裂を入れても、この「自明性」にとらわれた人々たちの目には入らない。それを見るためには彼らにたいする〈寛容〉が必要なのである。それを呼びかける氏の文章を読みながら、筆者は李光洙のある小説を思い浮かべた。

3. 李光洙の小説「蠅」

1943年秋、李光洙は本格的な対日協力を決意して一連の日本語小説を書きはじめた。その最初が『國民総力』に発表した短編「蠅」である⁵。年齢制限のために愛国班の勤労奉仕に出られない老人が「お役に立ちたい」一心から、勤労奉仕に出た人々の家庭の蠅を取りつくすという話で、表面的には模範的な「愛国小説」、かつ蠅撲滅キャンペーンの「衛生小説」である。しかし半ズボンに半袖、運動靴を履いて学生用のカンカン帽をかぶった骨と皮の老人が蠅叩きを木刀にみなして「遺棄死体総計七千八百九十五匹の蠅の叩き殺し」を完了する姿には滑稽を通りこして鬼気迫るものがある。おそらくこれは5年前に岡山県で起きた、結核を病む青年が学生服に軍用ゲートルを巻き、鉢巻に2本の懐中電灯をさして一夜で30人の村人を惨殺した事件のパロディであろう。この小説からは、作者の内部から発するうめき声のようなものが聞えてくる。日本語小説だけではない。李光洙が対日協力を踏み出した1939年1月に発表した「箱根嶺の少女」⁶という朝鮮語小説では、善意にあふれた日本の少女がいつまでも剥いてくれる柿を死ぬ

⁴ 『三千里』1936年8月号、83頁。ところで李光洙はこの年、日本の雑誌『改造』8月号に「萬爺の死」という小説を掲載しているが、この雑誌はアンケートに答えたあとに出たため、誰もこの日本語小説について言及していない。なお張赫宙は「朝鮮の事を題材にする」というさらに厳しい条件を付けたうえでアンケートの定義に賛成し、自分の作品の一部（日本語で書いた小説ということであろう）は朝鮮文学ではないと回答している。だがこれは、前年文壇の自分に対する排他的な空気を「文壇ペスト菌」と指摘して物議を醸した彼が放った皮肉と受けとることもできるようなにも思われる。

⁵ 波田野節子「李光洙の日本語小説「加川校長」と「蠅」について」『朝鮮学報』第238輯、2016年、1-33頁。

⁶ 「箱根嶺의少女」『新世紀』1939年1月。

思いで食べつづける少年が描かれているが、これは読み方によってはブラックユーモアであり、ここにも二つの声が響いている。こうした複数の声を聞き取る耳を持つために必要な〈寛容〉を、本書で金哲氏は呼びかけているのである。

ただ、日本に生まれたものにとっては、金哲氏が韓国の人々に呼びかける〈寛容〉にどう呼応すべきかの問題は微妙である。「奪われた民族」をアイデンティティとしたがために〈寛容〉を持つことが難しくなった人々に向かって、奪った側に属する人間が〈寛容〉を持てと呼びかけることは躊躇せざるをえない。そのうえ昨今のねじれた日韓感情の空気のなかでは、〈寛容〉が足りないという主張自体、曲解される危険性をはらんでいる。

渡辺直紀氏が本書の翻訳を最初ためらったのも、同じ思いからだっただろう。ためらいの理由について氏は、最近の日韓間の歴史認識の議論に見られる風潮のなかの心ない言質を憂え、「金哲氏の本書の主張を、この私が日本の研究者として理解し、その言わんとするところを実践するためには、(中略：筆者)まさに本書で氏が植民地朝鮮の文学者について指摘しているような「二枚舌」的な努力、「きわどい精神の曲芸」が、この私にも要請されるのではないかと思ったのである」と書いている。奪った側に属する者はつねにこの感覚を忘れてはならないと思う。それを持ちながら本書の訳出を決断された氏に敬意を表する所以である。

4. 方言と翻訳

最後に、帝国と植民地ではなく、読者と原作者のあいだでつねに立ちすくんでいる翻訳者の立場から一言述べたい。第3章の最初に、方言を使わない例と使った例として引用されている李光洙の『無情』と金東仁の「舟歌」は、筆者が訳したものが下敷きにされている⁷。前者はほぼそのままだが、後者は「おまえ、どうしてここにいるんだ？」が「おまえさ、どうやって、ここ来たべ？」というように方言に変えられている。

金哲氏は、近代国家の「国語」が形成される過

程においては、標準語が地方の方言に対して優位になるのが一般的だが、植民地朝鮮においてはそれがより上部の枠組み、すなわち朝鮮語を帝国の方言の一つとして規定する帝国主義的枠組みに由来していたと述べる。そしてこの標準語の優位という構図が、解放後は国民国家建設のなかで教育によって現代まで受けつがれていることを、朴景利の『土地』を例にして指摘している。

ところで、周知のごとく方言はいま消滅しつつある。方言を取り入れたことで評価されている例として氏が挙げた李文求の『おらが村』シリーズのような作品が、いつかは方言で書かれているがために理解不能となり、読者に感動を与えなくなる日が来ないとも限らないのである。

翻訳は、方言に関するこうした変化を先取りしているのではないだろうか。ソウルの言葉に疎かった金東仁は戦略的に平安方言を使ったが、『金東仁作品集』で筆者はそれをあえて訳さなかった。古都平壤の妓生がたとえば舞妓のような京都弁で話したら、その背後に流れるのは大同江ではなく賀茂川になってしまうからだ。それで登場人物の言葉に訛りがあることを地の文に書きくわえて標準語で訳すという方法を取った。

朴景利の『土地』全20巻はいま日本で新たな翻訳が始まっているが、そこでも方言は使われていない⁸。第1巻の訳者である吉川風氏は凡例で、「日本の特定地域の方言で話すと、その地方のイメージが強く浮き出てしまうことから避けた」と書いている。したがって、慶尚道方言を使わないことによってヒロインの人間性の孤高さを示すという、金哲氏が紹介している作者の意図は、日本語訳においては無視されているわけである。作者の意図を優先すべきか、読者に違ったイメージを与えぬようにすべきか、翻訳者は自分なりの判断を下さねばならない。ちなみに李泰俊の『思想の月夜』の訳者である熊木勉氏は、咸鏡道方言の訳に九州の訛りを使用している。一方で、世界進出をねらう最近の若い韓国作家たちは、翻訳のことを考えて最初から無色透明の文体で書く傾向があると聞

⁷ 前掲『無情』123頁。前掲『金東仁作品集』23頁。ところで金哲氏は、李光洙の作品には方言がまったく登場しないと書いているが(43頁)、『無情』の9節と10節の英采が話す身の上話のなかには平安道方言の「プティダ」が頻出し、進むにつれてなくなっている。

⁸ 朴景利の『土地』は1980年代に安宇植と鎌田光登によって翻訳されたが中断し、2016年11月からあらたな翻訳が始まっている。クオンから2022年までに全20巻が刊行される予定で、現在第3巻まで出た。吉川風と清水知佐子が訳語を統一して交互に翻訳するという。

いている。

帝国主義的な枠組みから、国家主義的な枠組みへと転換して国語教育のなかで優劣を保ちつづけた標準語と方言は文学作品のなかで今後どのような方向をたどることになるのだろうか。南北統合が実現したとき、ソウルと平壤の言葉のあいだに階層性が現われるようなことはないのだろうか。文学における方言の将来を金哲氏はどう考えているのか、気になるところである。